

令和7年度 学校評価報告書（目標設定・実施結果）

視点	4年間の目標 (令和6年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月12日実施)	総合評価（3月31日実施）	
			具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1 教育課程 学習指導	<p>①インクルーシブ教育実践推進校としての取組を主軸に、系統的な教育課程を構築する。</p> <p>②1人1台端末を活用し「主体的・対話的で深い学び」を追究した授業実践を組織的に積み重ね、「自ら学び続ける生徒」を育てる。</p>	<p>①生徒の多様なニーズに応える教育課程を構築する。また、UDLの観点に基づいた検証を全教育活動について行い、すべての生徒にとって学びやすい環境を整えていく。</p> <p>②1人1台端末や電子黒板、採点システムの効果的な活用など学校DX（デジタルトランスフォーメーション：デジタル技術を活用して、より良く改革）を推進することで、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を充実させ、生徒が主体的に学んでいく能力を育成する。</p>	<p>①すべての生徒のニーズに応じた教育課程の検討し、実現を目指す。UDLの観点を理解し、全教育活動において検証を行う。</p> <p>②1人1台端末や電子黒板などのデジタル技術を活用して「個別最適な学び」と「協働的な学び」を充実させることを意識した組織的な授業改善を行う。</p>	<p>①生徒にニーズに応じた教育課程の実現ができたか。UDLの観点に基づいた検証を行ったか。</p> <p>②校内研修会、研究授業を通して「生徒が主体的に学んでいく能力」育成することへの教職員の意識が高まり授業実践が進んだか。</p>	<p>①生徒のニーズに応じた教育課程を実現した。UDLの観点に基づく検証を行った。1・2年生の各教室の廊下にホワイトボードを新設して様々な連絡に役立てるとともに、日々の清掃活動を通じて学習環境の整備に努めた。</p> <p>②研究授業を6教科で実施し、分科会で授業を受けた生徒から感想を話してもらった。また、指導主事4名に指導助言をいただいた。定期試験におけるデジタル採点を実施し、オンライン返却を行った。朝学習でのClassiの活用、日々の授業でロイノートを活用することで「生徒が主体的に学んでいく能力の育成」を進める授業実践が進んだ。</p>	<p>①UDLの観点に基づいた検証を引き続き行っていく。フロントゼロの取り組みを徹底する。</p> <p>②日々の授業、校内研修会、研究授業を通して授業実践を更にブラッシュアップすることに努めている。</p>	<p>①特別募集で入学した生徒も含めた教育課程を編成し、施設・設備面で工夫と教職員の手厚い指導で教育効果をあげている。特別募集の生徒がクラスに溶け込んでいる。</p> <p>①一人一人の特性に応じた優れた実践を重ね、校内で十分に共有することで、インクルーシブな学校の開発への動機づけがなされている。</p> <p>②指導主事を招聘し、教職員全員で取り組む研究授業で課題を共有している。研究協議の在り方を含め、端末使用ありきではなく、適切な活用場面を継続して検討・研修してほしい。</p>	<p>①「特別募集の生徒がクラスに溶け込んでいる」「インクルーシブな学校への動機づけがなされている」というコメント等からも、本校の教育活動については一定の評価を得ていることがわかる。しかし、いわゆる「進学希望校」とインクルーシブ教育実践推進校として、すべての生徒にすべての教育をという理想を実現していくためには何が必要かを常に考えていく必要がある。</p> <p>②一人一台端末の利用については一定の成果が上がっているが、引き続き教員側のスキルの向上が必要になると考えられる。</p>	<p>①生徒の多様なニーズに応じていくため、研究授業等を通して、全教員が常により良い授業を追い求めていくとともに、進学希望校という認識が定着するための方策を見出していくべく努めている。</p> <p>②情報機器の操作等については、教員によって習得している知識等に差異があるため、年度当初から研修会等を開催して格差を縮小していきう。</p>
2 生徒指導・支援	<p>①安心・安全な学校生活を保障するとともに、すべての教育課程を「支援」の観点に基づいて検証・改善していく。</p> <p>②生徒の自己表現・自己実現の機会を充実させ、協働と成功体験の積み重ねによる豊かな人間性を育む。</p>	<p>①規範意識の醸成を図るとともに、授業を大切にすることを育成する。また、すべての生徒が安心・充実した学校生活を送れるように支援するとともに、教育相談体制を充実させる。</p> <p>②生徒が主体的に企画・運営に携わる質の高い学校行事や部活動の在り方を検討し、その実現を模索していく。</p>	<p>①遅刻と生徒の身だしなみが周りに与える影響を生徒に理解させ、遅刻を減らし身だしなみの指導を行う。</p> <p>①サポートドックなど生徒との個別面談を通して支援ニーズを把握し、生徒理解を進めながら適切な相談体制の確立を図る。</p> <p>②学校行事の広報活動に、生徒会執行部が中心となって情報発信を行い、生徒の関心と参加意識を高める。</p>	<p>①学校全体として遅刻する生徒数とその頻度が減少したか。また、服装の違反が減少したか。</p> <p>①支援ニーズを適切に把握し、生徒理解が促進され、相談につながられたか。</p> <p>②生徒会執行部を中心に広報活動が行われ、生徒の行事に対する関心や主体的な関わりが高まったか。</p>	<p>①登下校時の交通安全指導や制服・頭髪指導を学校全体で継続的に行った結果、遅刻・欠席件数の減少につながった。また、サポートドックを活用し、スクールカウンセラー等と連携しながら、生徒一人ひとりの状況に応じた支援を組織的に進めることができた。</p> <p>②生徒会執行部が50周年記念企画として行った全校生徒による「50」の人文字は、ドローン空撮を取り入れる工夫などが評価され、令和7年度神奈川県立学校の児童・生徒表彰を受賞した。</p>	<p>①今後は、遅刻や身だしなみに対する指導を「注意」にとどめず、規範意識の内面化につなげる努力を行う。また、支援ニーズの早期把握と情報共有を一層進め、連携した相談・支援体制をさらに充実させ、安心して学べる学校づくりを推進していく。</p> <p>②撮影された写真や動画は学校広報にも大きく貢献できたが、次年度以降は周年記念と絡めることが出来ないため、イベントのきっかけ作りを検討していく。</p>	<p>①卒業式は厳粛な雰囲気、まじめさと温かさが感じられ、証書授与の所作、卒業生・在校生の言葉は素晴らしかった。</p> <p>①行動改善にとどまらない規範意識の内面化はどのような組織においても課題となる。様々な方略を用いて根気強く働きかけてください。</p> <p>②津浜祭や卒業式後の生徒企画など、自己表現の鮮やかさが感じられた。学校行事での全般的活動については生徒の自律性を保ちつつ実学として生徒自身の意欲や学びを高める教育的アプローチができるとなお良いです。</p>	<p>①②規範意識の醸成やモラル・マナーに係る粘り強い指導が実を結びつつある。それは、生徒の学力向上にもつながり、学校全体で学習や行事等に取り組んでいこうという意識の向上に貢献している。</p> <p>①生徒との個人面談等を通じて個々のニーズを把握し、適切な対応を行うことにより学校の生徒理解、生徒や保護者の学校理解につながっている。</p>	<p>①規範意識の醸成やモラル・マナーに係る取組は次年度も継続して行っていく。</p> <p>①個人面談を始めとする生徒の多様なニーズの把握とその対応については、次年度も引き続き積極的に取り組んでいく。</p> <p>②生徒が主体的に企画・運営に取り組むべき学校行事では、教員はサポート役に徹するなど、生徒の社会性や自主性、積極性の育成に力を入れていく。</p>
3 進路指導・支援	<p>①キャリア教育の視点に基づいた進路支援とカリキュラムマネジメントに取り組む。</p>	<p>①インターンシップ等、体験的なプログラムを積極的に活用し、個々の生徒のキャリア意識を高める取組を推進する。また、教科活動の中で</p>	<p>①スタディサポートや進路説明会等を通じて、各生徒の適性把握やキャリア意識の向上を図るとともに、Classiと連携することで、個別最適</p>	<p>①様々な指導の場面で、生徒一人ひとりの進路希望や適性を正確に把握し、個に応じた支援を行うことができ</p>	<p>①スタディサポートやR-CAPなどを活用し、自らの適性を把握することができた。また、朝学習で用いているClassiと連携することで、個別最適な学びを充実させた。さらに、各学年で</p>	<p>①1・2年生を中心にキャリアセンターを活用していない生徒も多く存在している。多くの生徒に対し支援していくために、キャリアセンターの周知に力を入れていく必</p>	<p>①②職員室前廊下の学習スペースはとても良い。キャリア教育や進路指導に結び付けられるとよいと思う。</p>	<p>①②職員室前廊下の学習スペースは使用頻度が高い。また、昨年度は年度途中に進路室からキャリアセンターへの配置換えが行われ</p>	<p>①年度当初のキャリアオリエンテーション等においてキャリアセンターの役割や利用方法について生徒全体に周知し、年間を通じての利用が</p>

	視点	4年間の目標 (令和6年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月12日実施)	総合評価(3月31日実施)	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
		②系統的な進路支援体制の構築とともに、個別支援を充実させ、一人ひとりのニーズに合った進路実現を目指す。	ロイロノート等の活用と家庭学習の習慣化を図っていく。  ②生徒の進路希望に応えられるよう、個に応じたキャリア教育を推進する。また、教科指導や特別な活動等にキャリア教育の視点を取り入れ、3年間という在学期間全体を見据えた指導内容等を研究する。	な学びを充実させ、進路希望を実現させるよう支援する。 ②Classiを活用し、自己分析を行い、目標を実現させるための力を身に付けさせるとともに、総合的な探究の時間を通じて、自分のキャリアを主体的に想像することができるよう支援する。	たか。  ②生徒一人ひとりが、自らの希望や適性を分析し、主体的に進路を切り拓く支援ができたか。	進路説明会を開催し、進路への意識を高めた。四年制大学への進学率は約60%であった。 ②総合的な探究の時間では各学年業者なども利用し、進路探究や各分野への理解を深め、主体的に進路を切り拓く支援を行うことができた。	要がある。  ②スタディサポート、Classiを活用し、個に応じた学びを充実させることができた。次年度から朝学習がなくなるため、Classiの活用方法を再検討しなければならない。		たために、生徒側の認識度があまり高くなかった。今年度は当初から新しくなったキャリアセンターの魅力と利用方法等についてすべての生徒に周知し、一定の効果を得た。 ②生徒が一般社会に出たときには、情報端末の操作が不可欠であることから、学習だけにとどまらず、津浜祭において電子決済を採用するなど、学校行事等においても端末を利用した取組を実施した。	円滑に進むように取り計らっていく。  ②今後、授業以外の場における校内での情報端末の利用について、さらに何ができるかを検討していく。
4	地域等との協働	①地域への貢献と地域資源の活用を両立させ、地域とともに育ち、地域とともに伸びる学校を目指す。 ②信頼される学校づくりのため様々な状況を外部に情報発信する。	①学校運営協議会や武山支援学校分教室といった地域の教育機関等と連携を図り、本校の教育力を高める。  ②各種学校説明会やホームページによって保護者や地域に向けた本校の教育活動の発信に努め、信頼される学校を目指す。	①各種の教育機関、企業、行政機関等による出前授業や地域貢献活動等を通じて、地域資源を本校の教育活動に活用する。 ②各種学校説明会やホームページでの情報を充実させ、学校生活やインクルーシブ教育の取組等について発信する。	①地域の人材活用・連携に向けて働きかけ、実践ができたか。  ②各種学校説明会やホームページにおいて充実した情報を発信することができたか。	①近隣地域の教育機関等を含めた外部講師による分野別学習や学校周辺の清掃を通じた地域貢献、地域行事のポスター校内掲示など、地域と教育の連携に努めた。 ②学校説明会だけでなく、ホームページで“津浜Diary”を新たに掲載し、高校生活やインクルーシブ教育の取組について発信した。	①武山支援学校分教室との積極的な交流や地域人材の活用に向けた取組の活性化を模索していく。  ②ホームページの定期的な更新に一層力を入れるとともに、更新に携わる人材を育成する。	①北下浦・長沢・津久井地区は、地域連携に熱心な地域なので、引き続き連携してほしい。 ②ホームページの「津浜Diary」はとても良い掲載です。生徒の活動がつかみやすく学校の魅力が伝わりやすいと思いました。よりキャッチーな写真や文章の工夫などを期待している。	①②近隣の中学校からは「津久井浜高校を目標にしている」という声が多く聞かれています。中学生にとって本校は根強い人気があることがうかがえる。今後とも情報発信の機会をとらえて、今以上に本校の魅力を伝え続けていくことが肝要である。	①外部機関との連携については、今後も現行の取組を踏襲することを基本とするが、連携先の追加・変更等には柔軟に対応していく。 ②学校説明会や、中学校で行われる進路説明会における説明内容を精査し、魅力や特色を十分に伝えていくとともにホームページの更新回数を増やすなど、情報発信に今後も積極的に取り組んでいく。
5	学校管理 学校運営	①不祥事ゼロに向け、教職員が一丸となって、風通しの良い環境を醸成する。  ②「働き方改革」を新たな創造に結びつける。	①ミスは起こりうることを念頭に、不祥事を根絶し、生徒が安心して学校生活を送るにはどうすればよいかを常に考え、教職員の規範意識醸成や校内環境の整備を行う。  ②「働き方改革」を推進にこれまで以上に取り組み、教職員が健康で働きやすい職場づくりを進めていく。	①教職員に対し、具体的なケーススタディを通じて、倫理的な判断力を養い、コンプライアンスを遵守できるように研修を行なう。フィードバックを収集し、研修後の理解度や遵守状況を確認する。 ②教職員が教育に専念できるよう、事務作業を専門のスタッフに任せ、教職員の負担を軽減し、教育の質を向上させる。	①倫理的な判断力を養うことができたか。コンプライアンスを遵守できたか。  ②改革前後の業務時間を比較し、効率化が図られているか。事務作業にかかる時間の減少や授業準備時間の短縮ができたか。	①「人間はミスを犯すものである」という前提に立ち、個人の注意義務だけに頼らない不祥事防止体制の構築に注力しました。教職員一人ひとりが「自分事」として規範意識を高めるとともに、物理的・心理的な校内環境を整えた結果、今年度は重大な不祥事の発生はなく、生徒の安心・安全を維持することができました。 ②「働き方改革」を加速させるため、専門スタッフとの連携による分業体制を確立しました。教職員の心身のゆとりが生まれ、職場全体の活気が高まりました。	①不祥事根絶に「終わり」はありません。現在の良好な環境に安住することなく、今後も以下の点に注力します。 慣れによる「慢心」を排除するための、チェックシステムの再点検。若手からベテランまで、世代を超えたコミュニケーションのさらなる活性化。 ②専門スタッフの配置に依存するだけでなく、教職員同士でも「廃止・簡素化する業務」を常に見直し続ける自浄作用を定着させる必要がある。「教員でなければできない仕事」と「それ以外」の仕分けを定期的に行い、過度な責任感から業務を抱え込みすぎない、互いにフォローし合える組織文化を醸成する。	①不祥事防止について、特に校務ではない非行についてはシステムで防ぎづらいため、引き続き根気よく意識づけをしていってほしい。 ①②「学校管理・学校運営」の視点が教職員の綱紀保持と働き方改革のみなのはどのようなのでしょうか。奉仕精神の高い教員が多くおり、コスパ感覚が身につくことを念頭にタイパを意識させ、自主的に手順の標準化や業務量の平準化、外部委託などを模索し、業務を量的・質的に改善することで、教師が生徒を導くという本来業務に邁進させることが肝要だと思う。	①昨年度に引き続き各部屋の内部整理を行う等、不祥事の可能性がある事柄の改善に取り組んだ。  ②教員の働き方改革は改革のペースが民間企業等と比較して遅い。今後とも教員の健康維持と県民に対するサービスの両立を図っていくことが必要である。	①不祥事撲滅は永久のテーマであり、次年度以降も引き続き取り組んでいく。  ②教員の働き方改革は、学校・保護者・地域等の相互理解がないと進んでいかないので、今後とも労働環境の改善に取り組んでいく。

